

## 査読論文

1917年の「帝国教育会主催南洋視察団」に関する考察  
— 教員の南洋視察旅行にみる井上雅二の海外発展観の一断面 —

宋 安寧\*

## 要旨

本稿は、1917年に帝国教育会が主催した南洋視察旅行の特徴を明らかにするものである。視察旅行は、1916年に教育界において第一次世界大戦後の教育の在り方を巡る議論の中で提起され、「海外発展の気風養成」という趣旨の具現化として行われた。一方、実業界において1910年代から自身の活動を南洋開拓に転向した井上雅二は、教員に向けての事前講話を通して、教員の南洋視察旅行に関わった。海外発展に必要な日本人の資質を如何に養成するかという井上講話の趣旨は、視察旅行に反映され、教員によって受容された。その受け止め方は、教員個々人の経験に基づき多様であった。

## キーワード

帝国教育会、南洋ブーム、南洋視察旅行、井上雅二、海外発展

## I はじめに

本稿は、筆者が行った戦前初等中等教育機関の教員による植民地満洲朝鮮への視察旅行（当時満鮮視察旅行と呼ばれた）研究<sup>1</sup>の延長として位置づけられる。教員の満鮮視察旅行は、日露戦争直後に日本の生命線であると認識された満洲朝鮮への関心が強くなると、帝国教育会や地方教育会を中心に担われ、官民共催の形で1940年まで継続的に行われた。筆者はこの視察旅行が植民地統治の実情を国民に周知するための施策であることを明かにした。管見のかぎり、教員の植民地視察旅行に関する研究<sup>2</sup>は乏しく、さらに南洋視察旅行<sup>3</sup>に限定すると皆無といっても過言ではない現状である。

植民地政策をめぐる「北進」と「南進」の力学的変化にともなう植民地・占領地への教員の視察旅行と植民地統治政策との関連性の全体像を明らかにするために、南進政策の舞台である南洋への視察旅行の実態の解明が必要不可欠であると考え、後述するようにかつての満鮮視察旅行に参加した教員が新たに南洋視察旅行にも加わったケースも判明している。満鮮視察旅

---

\* 執筆者：宋 安寧

所属/職位：立命館大学 BKC 社会研究機構社会システム研究所/客員協力研究員

連絡先：〒525-8577 滋賀県草津市野路東1丁目1-1

E-mail: anningyuning@yahoo.co.jp

行での体験は、どのように南洋視察旅行に影響したのか、さらに日露戦争で誕生した満鮮視察旅行ブームと第一次世界大戦を契機に始まった南洋ブームは、どう違うのか、これらの事項を明かにすることで、植民地統治政策の変化に応じた視察旅行の連続性と相違性の解明につながると考える。

第一次世界大戦を機とした日本の東南アジアへの経済的進出の活発化に伴い、実業界や一般庶民の間でも南洋への関心が高まりつつあった。教育界において、戦後教育の在り方に関する議論の中で、従来の満鮮視察旅行に加え、南洋視察旅行が実施された。その嚆矢<sup>4</sup>となるのは、本稿の検討対象である1917年「帝国教育会主催南洋視察団」である。名称は、南洋で一括されたが、日本最初の植民地で南進政策の拠点と認識されていた台湾及び台湾と歴史的・文化的・経済的近接性をもつ対岸の「南支」(厦門・香港・広東等)も視察地に含まれていた。満鮮視察旅行と比べ、南洋視察旅行は、実施時期が後発的で規模も小さかったが、植民地占領地視察旅行の全容を解明するためにはその検証を視野に入れる必要がある。

南洋視察旅行は1917年の実施を皮切りに、昭和期に入って以降1927年から1933年まで、文部省主導・民間会社後援の主催により毎年実施された<sup>5</sup>。南進政策の展開に伴う南洋視察旅行の変遷を総合的に把握するために、起点である1917年の視察旅行の解明が必要不可欠であると考えられる。本稿の目的は、1917年「帝国教育会主催南洋視察団」の事例に焦点を当て、南洋視察旅行の特徴を考察することである。具体的に南洋視察旅行がどのように企画されたのか、参加者がどのような人物像をもっていたのか、彼らが何を発信したのかを検討する。

植民地である満洲や朝鮮半島と異なり、1917年時点の南洋は、欧米列強の植民地であり、日本による国家レベルの関与が表に出なかった。日本国内における南洋についての主要な情報源は、政治家や学者、南進論者、実業家などによる発信であった。「帝国教育会主催南洋視察団」には、井上雅二(1877~1947)が視察者に向けての事前講話(以下、井上講話と略す)の形で関わった。後述するように井上の関与は、南洋視察旅行の方向性を与えるうえで、決定的であった。アジア主義者と教員の視察旅行に何の関連があるのかも筆者の関心の一つである。よって本稿は、井上講話の内容に触れつつ、それが教員の南洋視察旅行に与えた影響及び教員がどのように講話内容を受容したのかも視野に入れる。

まず井上に関する人物史研究を見ておこう。井上は、アジア主義の唱導者で、植民地官僚の経験を持ちながら、南洋開拓の第一線に身を投じた実業家でもあり、世界各地を遊歴する植民政策の実践者であるのと同時に政界にも広い人脈を有するなど、多様な側面を持つ人物である。人物史研究として既に戦前の1932年と1942年に永見七郎によって執筆された井上伝記があった<sup>6</sup>。この伝記には井上の日記や講演が収録されており、時系列で井上の活動軌跡が整理されたものである。時代の制約で、この人物伝は井上を帝国の発展に尽力した時代の寵児と見なしており、その人生経歴を礼賛する視点で一貫し、英雄史観の側面を免れない。稲野強の研究<sup>7</sup>は、日露戦争前夜の1903年に中央アジアを旅した井上の旅行記に注目し、開戦前の世界局勢に対す

る彼の冷静的な観察眼を評価し、井上の政治的洞察力に触れた。また近年の研究である藤谷浩悦の論考<sup>8</sup>は、井上と妻秀との二人を併行的に取りあげ、日清戦争から日露戦争までの間に夫婦が影響し合った実態を探った。アジア主義者である井上の活動と女子教育に尽力した秀の活動を関連づけた点は先駆的であり、青春時代の井上雅二像を構築した。本稿は、井上の人物像を補完する一助として、従来言及されていない教育分野での井上の動きに触れつつ、井上講話に反映された彼の海外発展観の一端を明らかにする。

次に直接本稿の主題に関連する1910年代の井上と南洋との関わりに関する研究を取りあげよう。主要なものとして河原林直人と横井香織の研究が挙げられる<sup>9</sup>。河原林は、南洋協会の成立過程を細部から全体像を構築する筆致で精緻に解明し、その中で井上が果たした役割を分析した。河原林は別の論考で東洋協会機関誌『東洋時報』における井上の動きを究明した。横井の研究は、南洋協会の人材養成制度に井上がどのように関わったのか、詳細に考察を加えた。1910年代、井上は南亜公司の設立をもって、自身の活動を南洋開拓に転向させ、自らの南進の信念を遂行しようとした。

河原林および横井の研究対象である南洋協会とシンガポール学生会館は、それぞれ井上が自身の南進理念を実現するための「文化工作」面と人材養成面における取り組みであったと言える。しかし、井上が自身の南洋開拓の初期段階において教員の視察旅行を通じて、南洋理解を促したこと、つまり日本の教育界に働きかけようとしたことは、殆ど知られていない事実である。本稿は、この点に留意し、1910年代における井上の南洋での活動軌跡を追ったうえで、井上講話の内容を掘り下げる。これによって、活動拠点を南洋に転向する際の井上の思想の一断面及び大正南進ブームの一端を窺えると考ええる。また井上講話への受容を理解するうえで、受容側としての参加者自身がどのような人物像を有するのかを考察するのも重要だと考え、参加者履歴を整理することにも注力する。

史料として、井上自伝や『帝国教育』に掲載されている井上講話、多様な形で発表されている教員の視察記<sup>10</sup>を用いる。なぜなら複数の視察記を照らし合わせ相互補完的に解読することで、よりリアルに視察旅行の実態を復元し、その本質に迫ることができるからである。

## Ⅱ 視察団の発案と視察者の群像

### 1 教育界の動向と南洋視察旅行の提起

第一次世界大戦勃発後、1916年1月から教育界において戦後教育の在り方に関する議論が活発化した。主要教育メディアが一斉に帝国教育会長澤柳政太郎をはじめ、各分野の専門家の所見や論説を取りあげた。その詳細は、表1のとおりである。

表1 1916年各教育雑誌に掲載されている戦後教育に関する論説一覧

『帝国教育』1月号(第402号)
論題「戦後の教育を如何にすべき乎」 文学博士 澤柳政太郎「戦後の社会状態と教育」84頁 文学博士 井上哲次郎「戦後の教育方針如何」90頁 文学博士 三宅雄二郎(三宅雪嶺)「個人の特能を發展せしめよ」94頁 志賀重昂「戦後の教育か、立国の教育か」97頁 東京音楽学校長 湯原元一「敵国の国民性に学べ」99頁 文学博士 吉田熊次「戦後の教育的経営」105頁 ドクトルオブフィロソフィー 長瀬風輔「世界的国民を養成すべし」109頁 日本女子大学校長 成瀬仁蔵「五条の御誓文を世界的に拡大せよ」112頁 法・文学博士 加藤弘之「教育には戦前戦後の別なし」116頁 文部大臣 高田早苗「時局に関する二三の教育問題」118頁
『教育界』1月号
吉田熊次、藤井利誉、宮田修の戦後教育に関する論説
『内外教育評論』
三澤糾「戦後教育の一大問題」(2月号) 林傳太郎「我国大戦後の中等教育」(6月号) 稲毛詛風「戦後教育の根本問題」(10月号)
『教育学术界』6月号, 7月号連載 山口小太郎「欧州の大戦と教育」
『普通教育』8月号 野辰男「戦後の学校教育」
『帝国教育』8月号(第409号)
「戦後教育に関する調査報告」計12項目, 第8項「海外発展の気風養成に関する件」
『帝国教育』10月号(第411号)
「本会調査『戦後教育調査報告』批評」 澤柳政太郎「戦後教育上最も重きを置くべき点」 岡田良平「先づ根本方針を定むべし」 上田万年「改善を要すべき教育の二三問題」 三輪田元道「形式よりも実質、制度よりも精神」 宮田修「戦後教育調査報告に対する所感」 和田豊「卑見は鈴木光愛君と同じからず」 渋谷徳三郎「戦後教育に関する調査報告を評す」
『帝国教育』11月号(第412号)
「本会調査『戦後教育調査報告』批評」(続) 衆議院議員三土忠造「戦後教育に関する調査報告を批評す」 貴族院議員木場貞長「戦後教育調査報告に対する所感」 御園生金太郎「余輩の主張は和田豊君と相容れず」 鈴木光愛「再び師範教育に関する卑見を述べて」 奈良県師範学校長「戦後教育の調査に就て」
『学校教育』11月号(戦後教育号特集) 広島高等師範学校教授訓導による研究成果

注：帝国教育会編『教育年鑑』(文化書房, 1917年11月, 272頁)の記述を手がかりに筆者が各雑誌を再確認し、整理作成。

表1から第一次世界大戦後の教育の在り方に関する議論が観念的なものから始まり、その後実際調査によって具体化していき、さらに専門家の意見を求める動きが確認できる。理論面の論説を概観すると、「独創の精神の養成、個性の尊重発展、科学的研究心の涵養、海外発展の奨励等の数項に帰す…何れも今回の戦乱に於ける交戦国民の勇敢なる活動に刺激せられて、

我國民の欠陥を痛切に覚醒したるの結果と見る」<sup>11</sup>との主張が多く見られた。つまり、第一次世界大戦後の教育界において、「海外発展」が教育方針として重視されはじめた。交戦国に対する認識を通して、日本の欠陥が意識され始めた。

一方、これらの議論は抽象的な理念に留まり、戦後教育に関する具体的な提案は見られなかった。そのため、帝国教育会が「今次の世界大戦争が国家社会各般の事物の上に將に人類思想上に及ぼす影響は大なるものであらう。教育の如きも我が国と云はず世界各国の教育上一変化を見るべきは明である」という目的で、「戦後教育調査要項」を掲げ、調査委員を委嘱し、改善を要する教育の全般事項に関する調査を行った。その成果として教育問題を多方面に網羅した「戦後教育に関する調査報告」が発表された<sup>12</sup>。これによると、調査内容が12要項に分けられ、第8要項は「海外発展の気風養成に関する件」である。さらに具体的に「イ、小学校教員及び中等教員を海外に派遣し教育を視察せしむる事。ロ、教員及生徒（中等学校）を新領土租借地及隣国に派遣し視察せしむる事。ハ、教科書中に海外発展に関する資料を増加する事。」という三つの項目に分けられた。すなわち、海外発展の気風を養成するために、まず教員の海外視察旅行が必要だと認識された。教員の南洋視察旅行は理論的な議論を終えた段階で、具現化の施策として位置づけられた。

視察先を南洋に指定した理由は、「欧州大乱の勃発以来我国の最も親密なる関係を有するに到れるは南洋殊に蘭領南洋なりと従つて是等の方面に向つて特に研究を要するは教育上必須のことなれば全国教育会の代表者が今夏を期して視察団を派するは有用のことなるべし而して本会の意向としては各府県教育会の賛成を得成るべく参加者の多きを望む」<sup>13</sup>との帝国教育会の募集要項からうかがえる。つまり、「蘭領南洋」（「外南洋」）を「我国の最も親密なる関係を有する」地域と見做していた。この認識の背景には、第一次世界大戦によって活発している南洋への日本の経済的進出があったと考えられる。地政学的に「明治初期からの宿題であった『北進』が一段落し、新たな進出先として従来二次的な関心の対象に過ぎなかった東南アジアが、視野に入ってきたのであった」<sup>14</sup>という認識が形成されつつあったと推測できる。

さらにいえば視察地域はなぜ「内南洋」にしなかったのか。「内南洋」について、日本海軍が占領した直後、1915年1月20日海軍省による御用船南海丸の提供と文部省の主導のもとで、帝国大学・高等商業学校・高等師範学校・高等農業学校の教員による南洋群島の「風土文物二就キ調査研究」が実施された<sup>15</sup>。つまり、「内南洋」をめぐるのは初等中等教員の視察旅行より研究者による学術調査が優先されたと推察できる。

## 2 視察者の群像

帝国教育会は、1917年5月に新聞や教育関係雑誌に募集概要<sup>16</sup>を掲載したと同時に「全国の教育会及地方長官に檄を飛ばし、視察者奨励方を依頼したり」<sup>17</sup>と、地方教育会及び官庁にも働きかけ、視察者の推薦を委嘱した。一体どのような人物が視察旅行に派遣されたのか。視察



者の人物像が彼らの南洋認識にも影響を与えうると考え、本節では視察者の履歴を詳細に追って個々の人物像を明かにする。表2は、視察旅行の参加者一覧である。

表2 1917年「帝国教育会主催南洋視察団」参加者一覧

所属・氏名・年齢	履歴
山形県新庄中学教諭 永井専次郎 45歳	①山形県最上郡土族に生まれ、1893年山形県尋常師範学校卒②横手中学校に勤務後、新庄中学校教諭。専門は植物学。 出典：①『山形県尋常師範学校年報第15-17(明治25-28年)』山形県尋常師範学校、1894-1895、10頁②常葉金太郎『葛麓の華』新庄市教育委員会、1977、75頁。
山形県東田川郡藤島 小学校長 山田與太郎 40歳	①1878.1.15山形県酒田市生まれ②1901.3山形県師範学校卒③現職後、女子師範学校訓導を経て、山形実業補習学校校長④1953.11.3褒章受賞。酒田報恩会会長、困窮者の救済及び児童福祉の増進に貢献。 出典：①『褒章受有者名鑑』褒章受有者名鑑刊行会、1957、338頁②『山形県師範学校一覧』山形県師範学校、1916、290頁③『山形県教育雑誌』山形県教育会、1910.2。
神奈川県通俗教育主事 村瀬米之助 49歳 (1869-1919) ●▲■◎	1869.8.15飛州大野郡灘郷に生まれ、長野県小県郡上田町漢学者上野尚志の家塾に学び、上田中学中退後、独学で1890年浦里小学校訓導。1892年村瀬平之丞の養嗣子となる。1896年から栃木県宇都宮中学校教諭、長野県師範学校、青森師範学校、埼玉県川越中学校教諭を歴任。1906年神奈川県厚木中学校教諭。1910年委任官、1911年従七位。1915.11大礼記念章及記念天杯を受け。1917.4神奈川県通俗教育主事(七級俸、高等官の待遇)、同県青年団指導委員、同県教育会幹事、同県教育会雑誌編集主任を兼任。1918.1.退職、3月病気で帰郷、1919.8.30逝去。専門は地歴史学、著作は「雲煙過眼録」「愛甲郡史」「南洋紀行」「鴻堂詩集」「平之丞伝記」「自叙伝」等。趣味は読書・旅行・音楽・絵画。 出典：村瀬武雄(長男)『村瀬米之助』1936.8、81頁。
横浜市横浜商業教諭 唯野真琴 34歳 △◎ ◎④帝国秘密探偵社『大衆人事録』1932年、167頁。	①1883.12.6福島県相馬郡日立村大字日下石に土族唯野真太郎の長男として生まれ、1903.3福島県立相馬中学校卒。②1905.7東京高等商業学校附設商業教員養成所卒、9月山梨県甲府市商業学校講師。1906.11.28一年志願兵で、横浜第二十九聯隊に入隊、1907.11.30陸軍二等主計、12.5歩兵第二十九聯隊下士官普通学教官、1908.2.29退営、3.27横浜商業学校教諭。1910.3.2横浜商業補習学校講師を兼任、3.11正八位③1918.9横浜商業学校教頭、1923.9-1924.8横浜商業学校校長代理。1928.4横浜商業学校に専門部が設置、主席教授、横浜女子商業学校校長を兼任。1933年、横浜商業学校を退職し、1933年まで女子商業校長④趣味は読書・旅行・謡曲運動、宗教曹洞宗。 出典①日比野重郎『横浜社会辞彙』横浜通信社1917、15頁②『東京商科大学卒業生名簿』1941、80頁③『神奈川名鑑』横浜貿易新報社1935、198頁。
名古屋市白川校訓導 伊藤公平 30歳	1888.7西春日井郡新川町に生まれ、故岩太郎氏の三男。1908年第一師範卒、東加茂郡足助校訓導。紅葉、南久屋、白川で訓導を歴任。1926.12豊田尋常小学校長、商業補習学校長、二男一女。 出典：『地方自治政の沿革と其の人物(愛知県)』自治通信社、1929年、31頁。
大阪府天王寺師範教諭 宮本藤 32歳 (1885-1932)	茨城県生まれ、1912年東京高等師範学校本科地理歴史部卒。1932年逝去。 出典：『東京高等師範学校一覧明治42年4月-43年3月』東京高等師範学校、1911年、132頁。
大阪府今宮中学教諭 三宮元勝 44歳 ◎	①熊本生まれ、1901年東京高等師範学校文科卒、佐賀県小城中学校教諭。②現職後、富田林中学校長。 出典①『高等師範学校第五地方部同窓会報告』高等師範学校内第五地方部同窓会、1902年、8月、39頁②◎石上欽二『尼野源二郎』紀念志刊行会、1921年、236-238頁。

<p>大阪市西天満小学校長 野村菊太郎 52歳</p>	<p>①1866.11生まれ、1885年大阪府立師範学校卒、1905年西天満尋常小学校校長兼学務委員、1913年文部大臣の選奨②1916.2勲八等瑞宝章③1921年大阪市立堂島尋常小学校校長④25年無欠勤で文部省の表彰⑤「辣腕家、北区教育ノ元老、剛直ノ士」。</p> <p>出典①山本桃洲『大阪の公人：附・聯合区制の小史』大阪の公人刊行事務所、1916年、650-651頁②『早稲田文学』第2期（123）、早稲田文学社、1916年2月、2頁③無名居士『行くべき道：人世相談』精華堂書店、1922年、118頁④日下真佐市『大日本現代頌徳名鑑』大日本現代頌徳名鑑刊行会、大1921年、71頁⑤水木梢『校長学』教育研究会、1922年、276頁。</p>
<p>茨城県師範学校教諭 吉澤俊一 1889-1950 ●</p>	<p>①1889.4.26長野県下伊那郡生まれ、1915.5東京高等師範学校地理歴史部卒②水戸中学校教諭①茨城県師範学校教諭。③愛知県第一師範学校教諭を経て、1923年福島女子師範学校附属小学校主事④1931年長野須坂中学校長⑤1934年飯田中学校教諭①1937年長野地方視学官学務課長⑥1950年逝去。</p> <p>出典：下線部分①『大長野県の現勢』長野県民新聞社、1938年、250頁。②『飯田万年記・水戸浪士伊那路通行』伊那史料叢書刊行会、1915年、32頁③『福島女子師範学校沿革誌』福島県女子師範学校1933年、9頁④須高地域史研究会『須坂・上高井の百年』須坂新聞社、78頁⑤『信濃教育』568号、1934年2月、17頁⑥『信毎年鑑』信濃毎日新聞社、1951年、171頁。</p>
<p>神戸市長狭小学校長 平尾岩吉 42歳</p>	<p>①1907-1910豊岡町立第一幼稚園園長に兼務②1912-1919現職③1925年から神戸遠矢尋常小学校長。</p> <p>出典①西村天来『豊岡復興史』但馬新報社、1935年、194頁②『神戸市教育史』神戸市教育史編集委員会、1966年、8頁③『兵庫県名鑑』神戸又新日報社、1927年、670頁。</p>
<p>神戸市楠小学校長 新井博次 52歳 1863-1928 ●△</p>	<p>1863.8.9年古河城代土井内蔵允家臣新井啓助の嫡子として生まれ。1881.7茨城県師範学校卒、茨城県久慈高等学校に勤務。1891年東京師範学校訓導。1896年台湾国語学校教授。1902年東京女子高等師範学校嘱託、訓導。</p> <p>1905.8兵庫県姫路師範学校教諭。1908年神戸市立神戸尋常高等小学校長。1913.6勲八等、瑞宝章。1915.2年現職。1918年東京市外池袋成蹊学園舎監、城西実務学校長。1928.8逝去。</p> <p>出典：『古河史跡写真帖』茨城県古河史蹟保存会、1935年、40頁。</p>
<p>神戸市川池小学校長 稲田春治 49歳 ●△■◎ ◎『大日本徳行録』第2巻、大日本徳行録刊行会、1943年、1240頁。</p>	<p>1869.1.25兵庫県田村伊右衛門氏次男として生まれ1891.3兵庫県尋常師範学校卒。城崎、川辺、武庫、美濃、美方各郡の訓導又は校長に歴任。1900.6美方郡視学、1901.10城崎郡視学、1904.6兵庫県視学、1906.4より諏訪山、明親、兵庫の各高等学校校長に歴任。1911年帝国在郷軍人会特別会員に推薦。1915.3現職、11月大礼記念章。1920.3休職。1921.4神戸市会議員に当選、5月神戸市名誉職参事会員。1924.1神戸市地方裁判所調停委員、神戸無尽株式会社取締役、社長就任。1928.5大阪アルミニウム製作所監査役、1937.5日本規格工業株式会社取締役、11月旭商事株式会社監査役。1938.3兵庫県掛保郡大津尋常高等小学校改築費金一万円寄附。1941年神戸大同無尽会社監査役、兵庫県教育会、神戸市教育会理事、兵庫県教育協会理事、神戸報国義会評議員、川池国民学校家庭会副会長、9.13紺綬褒賞。</p> <p>趣味は、読書・書画・詩歌・俳句。出典：◎</p>
<p>兵庫県城崎郡香住小学校長 山田喜代松 49歳 ●◎②『人を人にする人：奏任待遇小学校長』三光舎、1919年、186-189頁。</p>	<p>①1870.3.6生まれ。1894.3御影師範卒。美舎郡一日市尋常小学校（香住前身）訓導、1896年香住小学校長。1902年神奈川県愛甲郡視学。1904年現職に復帰、以来23年勤務。1906年大勲位貞愛親王の御名によって表彰を受け、文部大臣よりも多数表彰②1909年実業補習学校を創立、校長兼任。1911.2文部大臣の選奨。1918.11奏任官待遇。退職後、城崎町長①1937.8逝去。出典：①伽藍康裕『興亜日本建国史第2巻下（近畿大観）』日本同盟通信社興亜日本建国史編纂部、1940年、166頁。</p>
<p>高松市香川新報記者 吉田忠次 33歳 ●△◎『植民』12日本植民通信社、1933年2月、62頁。</p>	<p>①1918.3.21高松市議員に当選②1919.11.7香川県拓殖協会組立総会評議員③1927-1933海外興業株式会社香川県担任業務代理人④1932年、高松市衛生組合役員。</p> <p>出典①『高松市史』臨川書店、1986年、394頁、572頁。 ②『海外協会中央会各府県海外協会要覧』海外協会中央会1928年、78頁～79頁③『植民』6日本植民通信社、1927年1月。</p>

福岡市福岡商業教諭 菊池武幹 42歳 ■	①1876.11.23②南北朝時代の忠臣菊池武光と由緒ある家柄に生まれ、修猷館中学卒。1901年青山学院高等学卒、神奈川県立第一中学校教諭。1904-1905陸軍中尉の青年士官、荒木貞夫と共に梅澤道晴の麾下として日露戦争に出征、本溪湖の激戦に参加。1907.7歩兵中尉従七位勳六等で現職。1918年福岡商業学校長、1935年まで約30年勤務①正五勳四。妻トミ、福岡県岸原虎雄の長女、長男武尚早大法学部卒、次男真澄明九州帝大工学部卒、三男靖一、三女房子福岡高等女学校卒。 出典①『日本官界名鑑昭和14年版』日本官界情報社、1938年、13頁。 ②隈部紫明・山下博『福博の人物第2編』福岡出版協会、1935年、136頁。
熊本県第一師範教諭 森川勉 43歳 ●■	①1875.9長野県松本市に生まれ、東京府官吏森川精の長男。②1893年長野県尋常師範学校に入学。③1903.3東京高等師範学校本科第四学部卒、東京府立第三高等女学校教諭。1913年東京市視学兼講師⑦1917.4熊本第一師範学校教諭⑧1919.4満鉄撫順小学校長⑨1920.5長春商業学校長⑩1931年長春商業学校長退職。 著書『生理衛生界之知囊』（中興館書店、1920年）、『鉱物界之智囊：実験観察』（中興館書店、1923年）①趣味は銃猟、謡曲、書画、骨相学等。 出典①『満蒙日本人紳士録』満洲日報社、1929年、503頁②長沢武『北アルプス白馬連峰：その歴史と民俗』郷土出版社、1986年、144頁③『東京文理科大学、東京高等師範学校、第一臨時教員養成所一覧』東京文理科大学、1931年。そのほかは、本文の注釈を参照。
沖縄名護小学校長 八巻太一 40歳 ■	①山梨県師範学校を卒業②1912年読谷山尋常高等小学校長などを歴任後、③1925年沖縄県女子師範学校並県立第一高等女学校教諭④1930年沖縄昭和女学校を創立。戦争で全滅し廃校④戦後、沖縄キリスト教、久米島で布教。 出典①山城善三『沖縄事始め物語』旭広研、1971年、44頁②『沖縄市史第8巻』沖縄市教育委員会、1988年、32頁③島袋源一郎『沖縄案内』1932年、207頁④『那覇市史資料篇第3巻の8』那覇市企画部市史編集室、1981年、347頁。

註：1、参加者の所属・氏名・年齢は、『帝国教育』（第420号、1917年7月、83頁）と『兵庫教育』（第340号、1918年2月、11頁）に掲載されたリストを基に筆者が整理。履歴の欄の「現職」は1917年当時の所属を指す。氏名下の生年月日と逝去年月日は、判明している者のみ記した。

2、人物履歴は、筆者が地方誌、人物辞典、自伝などの記述を照らし合わせたうえ整理・作成した。各情報の出典は、番号で記した。

3、氏名下の記号について、「●」は視察前後に海外または植民地渡航経験を持つこと、「△」は帰国後に視察旅行についての講演を行ったこと、「■」は帰国後に視察記を公表したこと、「◎」は自伝や地方誌などに南洋視察経験が言及されたことをそれぞれ表している。下に当該伝記名を記した。

定員上限の25名に対し、計17名が集まった。教員の構成を見ると、小学校長が最も多く、その他中学校、商業学校、師範学校の教諭、教育主事など幅広い教育者が参加した。香川県から新聞社の記者が1名加わった。地域分布を見ると、東北・関東・四国・近畿・九州・沖縄の各地域にわたっている。航路の始発港である神戸や大阪などの関西圏の参加者が多かった。年齢を見ると、30歳から50歳までの中堅教員が参加していたことが分かる。応募条件の一つは、三年以内に疾病がないことであり、長い船旅に堪えるため健康条件が重視されていた<sup>18</sup>。

参加者の履歴に大きく二つの特徴が見られる。第一は、参加者の一部が南洋視察旅行までに何らかの海外あるいは植民地渡航経験を持つことである。団長を務めた熊本県第一師範教諭森川勉は、1906年湖北省武昌に教習として招聘され<sup>19</sup>、1911年の武昌蜂起で帰国した<sup>20</sup>が、1914年に中華民国七等嘉禾章を授与された<sup>21</sup>。視察旅行後にも1920年5月から1931年まで長春商業学校長を務め<sup>22</sup>、在任中の1926年に中等歴史地理教員の満鮮視察旅行に参加した。神奈川県通俗教育主事の村瀬米之助は、歴史地理学研究のため、1905年に朝鮮を遊歴した<sup>23</sup>。茨城県師範学



校教諭の吉澤俊一は、1912年から13年にかけて、朝鮮総督府の委嘱で行った鳥居竜蔵の満洲朝鮮調査に加わった<sup>24</sup>。神戸市楠小学校校長の新井博次は、1896年に台湾総督府国語学校教官として台湾に赴任し、約7年滞在した<sup>25</sup>。兵庫縣城崎郡香住小学校校長山田喜代松と神戸市川池小学校校長稲田春治は、1906年日露戦争直後の満韓視察旅行の経験を持っている<sup>26</sup>。福岡市福岡商業教諭の菊池武幹は、日露戦争に出征し本溪湖の激戦に参加した従軍経験の持主であり<sup>27</sup>、1922年の福岡県第四回南支視察旅行の団長も勤めた<sup>28</sup>。

第二は、参加者は褒章受賞者が6名もいて、教育界に人望や知名度を持つ人物である。大阪市西天満小学校校長の野村菊太郎は、1913年文部省に奨励され、同校に38年間も勤務し、郷土人物史の中で「威望四隣を圧するものあり、辣腕なるは既に世上周知の事実」と、定評のある人物である<sup>29</sup>。山田喜代松は、自治体の就学率を上げ、村の教化に尽力し、数回も文部省に奨励され、教育界の殊勲者と評された教員である<sup>30</sup>。稲田春治は、反骨精神が強く兵庫縣教育界の大立物と呼ばれ、教員の顔以外、退職後神戸市議員・民間会社の役員も経験し、多様な履歴を持つ人物である<sup>31</sup>。

なお、高松市香川新報記者の吉田忠次は、教育界の所属ではないが、「週球二回南米各国より中米・北米さては南洋・中華民国・満洲国等で随分多くの我同胞先輩有為の奮闘家に接眉の機を得て来ました」<sup>32</sup>と、香川県の移民事業に奔走した人物である。視察旅行の翌年1918年10月に「香川県知事佐竹義文国内の状況に鑑み植民奨励、海外発展策を講ずるの急務なるを思ひ拓殖協会を設立して其の目的を達せむ」ため、11月17日に香川県拓殖協会祖立総会及発会式が挙げられ、吉田忠次はその評議員となった<sup>33</sup>。教員の南洋視察団に加わった理由は、拓殖協会設立の事前情報収集のためであると考えられる。その後、井上が設立した海外興業株式会社の香川県担任業務代理人として、移民事業に関わった。

一方、選出された視察者に対し、どのような資金面の支援がされたのか、史料の制限で全容が不明であるが、個別のケースが判明している。例えば、神奈川県の場合、「大正六年横浜商業会議所紀事 第四回役員会 六月十二日開会・・・南洋視察員横浜商業学校教諭唯野真琴氏に金二百円補助の件に付報告を了したり」<sup>34</sup>のように、横浜商業会議所より補助金が出された。また南洋移民が多い山形県の場合、視察者2名に対し県費補助と郡費補助が与えられた<sup>35</sup>。

教員の南洋視察経験は、個々の人物に関する地方人物史や伝記、回顧録などにも業績として言及され、教員のキャリア評価にもつながったと考えられる。後述するように、人物の経験と個性は南洋認識や井上講話への受け止め方にも影響を及ぼしている。

### Ⅲ 視察団に向けての井上雅二の事前講話

#### 1 1910年代における井上雅二の南洋活動軌跡

井上講話の背景を理解するため、1910年代における井上の南洋での活動軌跡を表3に整理した。

表3 1910年代における井上雅二の南洋活動軌跡

年	主 要 活 動
1910年	1月七年間の韓国京畿道財政顧問として宮中改革の仕事を終え、帰国。 5月東京発、二回目の世界周遊を開始。
1911年	世界周遊の終盤で、マレー半島のジョホールを視察し、土地租借の願いを出した後、5月帰国。直後、森村市左衛門へ南洋開拓を表明。韓国の先輩に辞任挨拶。6.21-8.23南洋滞在。トロンスガイ植林地に一回目の入山。8.23日帰京、9.27南亜公司設立発起人会、10.22南亜会社が成立。11月東京敬養軒にて井上南洋行記念、重要人物参列。12.5-翌年10.31南洋滞在。12.28トロンスガイ植林地に二回目入山の入山。
1912年	夏にジョホールで南亜公司現地本部を建設。初めてマレー半島の密林を踏査、巨象に遭遇。7月マラリヤに罹患。9月蘭領リオ群島視察。10.31帰京。
1913年	4.1-6.8農商務省の囑託として、軍艦淀の南洋視察に同行。10.30帰京。
1914年	6.17-10.27南洋滞在。渡辺園を買収。第一次世界大戦が勃発し、南亜会社の経営に影響。
1915年	4.6東京から兵庫県丹波市へ帰郷、森村が同行し教育関係者に講演。4.13-10.27南洋滞在。
1916年	8.12-10.21南洋滞在。11.4日神戸着、船中ベスト患者が出たため、和田岬で12日間滞在、11.16日帰京。
1917年	3.2日東京発、21日星*着。4.23日星発、5.6日星帰京。8.11鎌倉木座別荘に避暑中の森村に南亜公司第二期計画を相談。帰途、長谷に寄って隠棲中の大浦兼武を訪問。8.15軽井沢に行き、帰一協会主催の山中会に出席。渋沢栄一男爵、姉崎嘲風博士、成瀬仁蔵、島田三郎、小山東助などに会う。19日伊香保温泉へ南亜公司社長開作氏を訪問。20日朝同温泉に避暑中の牧野伸顕を訪問し、南亜会社の第二期計画を相談。21日帰京、森村から第二期計画の書簡が届く。相談役和田豊治と社長開作の賛意を得て、重役会と株主会の審議を経て、南亜公司二期計画が開始。12.7東京発、24日星着。
1918年	1.4-10.28蘭領東印度視察、南亜公司事業拡大の候補地スマトラが決定。5月末帰京。馬來護謨栽培会社を南亜公司に合併の契約が成立し、再び南洋へ。7月末帰京。8月末スマトラ視察。10.14再度スマトラ視察へ、28日ジョホールに戻る。約一年間の蘭領東印度の視察を終えた。12.27-翌年1.4、森村家とともに熱海滞在。
1919年	3.8成瀬女子大学校長成瀬仁蔵の葬儀に出席(「告別の辞」森村)。5月末家族と福岡、広島を遊歴。6月初門司発南洋へ。8月末牧野全権一行と同船し星発。9.10神戸着、帰京した11日に森村が逝去。同年、早稲田学園以来の先輩福島安正も逝去。43歳の井上にとって悲痛の年。
1920年	2月兵庫県水上、多可両郡の強い推薦と先輩の進言で議員選挙に立候補したが、落選。6.25南洋に戻り、9月ジャワ視察、10月マレー半島内部調査。10.15日星発香港へ。広東で孫文一派の旧知を訪問。29日台湾着。南部中部を視察し、25年ぶりに新領土の実況を知った。11.8基隆発、12日神戸着。不況でゴム市価暴落、南洋の護謨栽培会社の二三農園は、南亜公司との合併を望み、南亜公司にとって転機。

注：永見七郎『世界を股にかけて：井上雅二氏の前半生』（日本植民通信社、1932年、494頁～556頁）に基づき筆者が整理・作成。\*「星」はシンガポールの略称である。

表3から分かるように井上は1910年に過去七年間の韓国での植民地官吏のキャリアに終止符を打ち、約一年間の世界周遊をした後、1911年南亜会社の設立をもって、実業家として南洋開拓に乗り出した。井上は、南洋に転向する心理歷程を「支那大陸を興亜の母体とすれば朝鮮満洲は其の右翼であり、南亜細亜は其の左翼と申すべきであらう。之が私の第二回世界周遊を試みて得たる結論である…興亜の立志と準備を終へ、朝鮮の経営に参加した者として、次に南洋の富源開拓に乗り出す事は最も当然、且自然の帰趨と考えられる…自分の眼に映じたのは、欧米に於て新に勃興した世界的大産業としてのゴムの栽培であつた」<sup>36</sup>と回顧した。つまり、世界周遊で興亜の理想を実現するために南洋開拓が必要であると実感し、その手段としてゴム栽培産業に目を付けた。帰国後、「実業界の巨人」と呼ばれ、著名な実業家であった森村市左衛門に「私は生命を投げ出します。貴下は金を出して下さい」<sup>37</sup>と、自身の南洋開拓の決意を表明し出資を求めた。森村の賛意を得て1911年南亜公司を成立させた。

南亜公司に対する井上の思いは、「南洋事業に対する余の覚悟」(1918年10月)に「南亜公司

設立の動機精神は森村翁父子と自己の精神的結合、国家的精神の合致…自己の根拠を南洋に置き、本国に来往して事業に尽瘁し、汎く南洋の富源を踏査し、専ら南洋の事業を提擧し、南洋に於ける日本人の勢力を統一し、本国に於ける対南洋の知識を開発し、以て帝国の南洋に於ける遠大の目的を達成し、国家百年の大計を樹立すること。南洋開拓は志にして南亜公司是業なり、志業一致<sup>38</sup>と記された。すなわち、井上は日本帝国の南進の将来性を見込んで南亜公司を設立した。自身の南進の信念を遂行するために、表3からうかがえるように井上は1910年代に大半の時間を南洋で過ごし、南洋開拓の第一線に身を投じていた。

では、1910年代に井上は教員とどのような接点をもったのか。表3の1915年の活動を詳細に見ておこう。4月の南洋行に先立ち、井上は森村に伴って帰郷し、森村による教育界に向けての講演が行われた<sup>39</sup>。その参加者と規模を示しておく。4月6日井上と森村は、京都の松吉旅館に一泊し、京都在住多数の女子大出身者と会談した。7日福知山の小学校で郡内の有志者学生700余名、8日柏原において朝は中学校、午後は女学校で郡内の有志者500名、9日篠山の公会堂で郡内の有志者700余名に対し講演が行われた。各日の夜に各自治体の実業家や有志者合わせて70名との懇親会が行われた。「到る処未曾有の大盛會にして、各町村長、中小学校長、町村会議員等挙つて集まった」といように、教育関係者が多く参加した。大正南進ブームの全盛期である1915年に井上は、南洋事情を日本国内に理解させるため、森村の知名度を生かし、まず自身の故郷の教育界からアプローチし始めたと考えられる。

さらに表3を見ると、井上講話が行われた1917年は、ちょうど南亜公司第二期事業計画の立案に当たる時期であったことが分かる。その計画では事業を英領マレー半島から蘭領東印度のボルネオとスマトラ方面に拡大する計画が立案されている。自身の南洋事業の将来にかかわる重要な時期において、教員を通して日本国内の南洋理解を促すことは、井上にとって重要であったと推測できる。では、この時期に井上はどのような南洋認識をもっていたのか、表4は1917年前後の井上による南洋関連の主要論説を整理したものである。当時の彼の主張や思想の一端がうかがえる。

表4 1917年前後の井上雅二の主要論説一覧

タイトル	掲載誌	発行時間
南洋の護謨業	『東洋時報』208号	1916.1
最も有望なる南洋の發展地	『南洋協會々報』2巻9号、10号	1916.9.10
開戦二年半後の南洋	『東亜時報』221号	1917.2
海外發展に関する国民の覚悟	『東洋時報』222号	1917.3
海外發展に関する国民の覚悟（承前）	『東洋時報』223号	1917.4
日本人の南洋に於ける經濟的發展と土地私下制限問題	『東洋時報』227号	1917.8
南洋に於ける本邦人の企業	『南洋協會々報』3巻5号	1917.5
馬來半島の土地制限問題	『南洋協會々報』3巻6号	1917.6

「海外発展に要する資格」	『最近植民研究第2(上)』東洋社	1918
「蘭領東印度企業ニ関スル鄙見」「大正七年蘭領印度視察」 「大正七年のスマトラ視察報告」	井上雅二『南方開拓を語る』(畝傍書房, 1942年)に収録	1918
拓殖事業と人物(一)(二)(三)(拓殖大学における講演)	『東洋時報』238, 239, 240号	1918.7.8.9
南洋事業に対する余の覚悟	井上雅二『剣掃録』(大参社, 1944年)に収録	1918.10
南洋における企業上の注意(「大国民の精神を養ふこと」)	井上雅二『南方開拓を語る』(畝傍書房, 1942年)に収録	1919.2

注：国会国立図書館デジタルコレクションによる検索結果に基づき、筆者が作成。

河原林直人の研究によると、1910年代東洋協会の機関誌『東洋時報』に掲載されている南洋関係の論説の2割ほどは井上による執筆であり、合計19本もあった<sup>40</sup>。表4の論説を見ると、実業関連の内容のほか、「海外発展に関する国民の覚悟」「海外発展に要する資格」「大国民の精神を養ふこと」とのタイトルに示されたよう、精神論が目立つ。その内容の大半は、自身の海外滞在体験に基づき、欧米植民地宗主国は植民地開拓や経営に雄大な気迫と開拓の精神を有しており、それに対して日本人は排他的、融合しにくいという欠点を指摘し、海外発展に必要な開拓精神を主張したものである。後述するよう、これらの言論の主張は、井上講話にも再度強調された。

## 2 井上講話にみる視察旅行への関わりと「海外発展」観

南洋開拓の初期段階で自身の創設した南亜会社の事業拡大期である1917年に行われた井上講話は、どのような内容であったのか、本節で井上講話を詳しく検討する。井上講話の題目は、「南洋視察団員諸君に告げて、海外における日本人の缺陷に及ぶ」<sup>41</sup>である。講話内容は、大まかに次の四点にまとめられる。

第一点は、第一次世界大戦後の南洋の変化についてである。井上は講話の冒頭でイギリスの植民地獲得に貢献した人物サー・スタッフォールド・ラッフルスのことを言及したうえ、海外発展に必要な資質の問題を提起した。引き続き、南洋の物質面と精神面の変化を力説した。まず物質上の変化は、「南洋にある白人にして本国の戦線に加はるものは日に多くなる。一方支那人も佛領安南の如きは既に十万内外の戦地輸送を見、印度の如きも多くの印度兵を戦闘に参加せしめて居る。かく植民地から引き上げる白人が続出するに及び、新しき資本を投じても事業を営むことが出来なくなる…此方面に於ける列国の経済状態が不振となつて来る。加之船舶は非常に減少して居り潜行艇戦にて危険多く、貿易上に不便を感ずることが甚だしい」(83頁～84頁)と、戦争の影響で欧米人による経済的活動ができなくなったことである。南亜会社の経営で南洋の第一線に活動している井上は、戦争がもたらした人的動向の変化やビジネスリスクに関する情報をリアルに把握し、「列国の経済状態が次第に不振の状況を呈すると共に、

日本人の活動は反対に益々好都合になつて来るのは自然である」との時局認識を示した。次に精神面の変化は、南洋の人々の覚醒である。「知識程度の低き土人も自己の同胞が歐洲の戦線に立つこととなる又欧州本国の状況も自然塗說道聴にて分明し其実力も認め従つて白人の鼎軽重を問ふ様の傾向となつた」と、「原住民」が自ら欧州戦場に臨んだことによって宗主国の実力を知らされたと井上は認識している。

第二点は、日本人の地位の変化についてである（84頁）。

日本人は多く九州の島原や五島辺の婦人や行商人が多かった。彼等は日本人として知識の程度最も低く、殆んど無教育なものが大部分を占めて居るので、従つて日本の地位などを自覚して居ない……かくの如き知識の程度の低い、卑しい業務に従事して居る日本人のみを見て居る南洋の人々は土人と云はず白人と云はず日本人を劣等なる民族と考へて居たのも無理はないのである……最近に於いて日本の知識階級の者が漸く南洋に渡航し、或は農業を経営し、或は商工業に従事するに及び、日本人の地位は漸く高まって来た……西洋人の中には、これまで日本人は戦争には強いが、人道の観念、衛生の思想杯には欠けて居ると考へて居たものが多かったが、我々が彼地に栽培事業をはじめると共に、第一着手に衛生の施設をしたので、少なからず驚いて居たやうである。更に今回の戦乱の爲めに、日本の軍艦の南洋近海に出没すること次第に多くなるに及び、日本の国威は次第に発揚し、南洋の土人が日本に信頼する念は非常に強くなる。

つまり、南洋における日本人の地位の上昇は、南洋に進出した日本人の階層の変化がもたらしたものであるとの認識であった。大戦前における日本人の地位は、「からゆきさん」をはじめ、沖縄からの漁業移民や床屋などのサービス業、小売業の従事者という明治初期に南洋に進出している日本人の影響によって低かった。大戦後、知識階層の南洋進出によって日本の地位が上昇した。これに加え、井上自身が参入したゴム栽培事業に象徴されるように、ビジネスによる南洋の文明化への日本の関与は、欧米宗主国にも認められた。1913年に軍艦の南洋視察に同行した井上は、南洋における海軍の活躍がもたらした現地の人々の日本認識の変化を知ることができた。

第三点は、教員の南洋視察日程に関する提案である。出発前に帝国教育会が示した「南洋視察旅程案」<sup>42</sup>は、航路・寄港地・旅行日数・旅行里程・旅費概算を大まかに記したものである。具体的な視察都市と視察場所は決まっていなかった。この「南洋視察旅程案」に対し、井上は詳細な提案を行った。まず「南支」の視察行程について、井上は次のようにアドバイスした（84頁）。

南清に立ち寄られ香港には二日ご滞在の由。香港に着いたらば、領事館をたづねるがよい。そして茲で予定を定め、附近を見学するがよい。香港へ立寄つたら、必ず広東を見ること



をすすめる。船の夜行に乗れば未明に着く。広東は支那の別天地で、商業上の中心である。人によるとマオカを見て広東を見ずに帰るものもあるが、これは心なきことである。衰へたる葡萄牙領のマオカを見るよりも、南支那の中心で清新の気に満ちたる広東に遊ぶ方が、どれだけ有益であるかも知れない。

上述の引用から分かるよう、中国大陸を遍歴し現地の事情を熟知している井上は、広東見学の経済的理由の提示に留まらず、交通手段までも提案した。領事館で香港の詳しい日程を打ち合わせることを指示した。

続いて南洋の視察日程について詳細にアドバイスした。「北ボルネオでは先づサンダカンを見ねばならぬ…（小さい港であるため）二時間も見れば十分である。以前東京市に奉職して居た友人の安藤安（保）太郎君が、今回此地で一百万円の南洋殖産会社を設け、棉花の栽培に着手して居られる。訪問するがよい。安藤君が不在ならば東洋移民会社に加藤清次君が居る。都合に依つては総督に逢ふもよい」、「バタビヤに着く時には、領事館から出迎へに来て貰ふやうにして置くがよい」、「スマランには二三の日本商店もあり台湾銀行の出張所がある。此地には台湾籍民の有力な郭春秧、顔江守等の富豪が居る、機会があつたら会見して彼地の状況を聞かせるも一得であらう」などの講話内容からうかがえるように、井上は視察都市・視察場所・視察所要時間・現地での面会者・連絡機関などの視察旅行の細部問題に提案を出し、自身の人脈も紹介した。またバタビヤで総督に面会する際、「余は日中燕尾服にて会見したが、今日では如何が知らない」とのように自身の経験を交えて、視察時の服装までアドバイスした。

後述するように、井上の提案はほぼすべて視察旅行に反映された。帝国教育会は井上が紹介した現地の経済界人脈、例えば台湾銀行、三井物産会社、東洋移民会社などの関係者を含む各機関に「紹介依頼等出来得る限り致置候必ず相当の便宜を得られ候」<sup>43</sup>と、事前に依頼状を發し便宜の供与を図ろうとした。帝国教育会が示した大まかな日程は、井上講話によって具体化されたことが考えられる。

第四点は、「海外発展」観である。井上は自身の海外経験に基づき、海外発展における日本人の欠点および海外発展に必要な資質・適性に関する見解を述べ、教員による教育上の協力を呼びかけた（86頁）。

（海外で）常に感ずるのは、日本人は大国民たる性格に欠けて居て、海外に発展するには不適当な国民であるといふことである。否な日本人は大有為の膨張的国民たる素質を持って居るが欠陥がある。此欠陥を陶冶せなければ大国民たることは至難である…（理由は）第一日本人は雄大な気象に乏しい。第二に堅忍なる性格を欠いて居る。第三に犠牲の精神に富んで居ない…此三者は大国民たる資格である。海外発展の根本素質である…樺太、台湾等の寒帯又は亜熱帯に植民地を有して居ても、その割合には発達が出来ない。日本人

が此資格を欠くのは、温和なる気候の中に生活することが重大なる原因をなしている…雄大なる気象とか、堅忍なる性格とかいふ点に於ては、英佛等の国民は遙に日本の国民よりも上位にある…独逸人でも露西亞人でも同様である。

これは、1917年頃の論著にも表れている井上の「海外発展」観である。例えば、1917年3月に発表した論稿「海外発展に関する国民の覚悟」の中で、井上はイギリス人、ドイツ人、ロシア人の開拓精神を称賛したうえ、日本人について「所謂島国的と言ふ一語で尽きると思ひます、器量が小さい、堅忍の志が少い、又独尊的でありまして、動もすれば互に排擠する…商人としては…眼前の利益に走って粗製濫造の弊に陥る、苟も日本人が多く集つて居る所では、互に兄弟喧嘩をする、統一がない…小なる愛国者の多いことである」<sup>44</sup>と、表現こそ異なるが、大国民としての資質を欠けている点を指摘した。井上は、一貫して「大国民たる資格」を唱えた。自身の活動舞台を南洋に転じさせ、自身の経営した南亜会社の事業拡大が立案されている1917年という時点で、井上は海外発展精神に富む人材を必要としていた。南洋での人材養成のみならず、日本内地の教育にも期待した。

そのため、井上は講話の最後に「日本人の大国民的性格を養ひ、海外発展の素質を作らんとするは、教育の力によらなければならぬ、今回南洋視察に赴かるる諸君は、何れも国民教育に従事せらるる人々であるから、此数十日の日子をなるべく有益に過ごし、以上の点に心を用ひ、帰ってからは幾多の勇敢剛毅なる第二国民に向つて大国民たるの精神を鼓吹せられんことを切望して止まぬ次第である」という点を強調した。つまり、海外雄飛に相応しい人材育成に教育の力が必要であると訴え、視察旅行でその必要性を確認し教育現場に生かさせようと教員に力説した。

では、井上講話に繰り返して強調されていた「大国民的性格」「大国民たる精神」、すなわち1917年頃の井上の「海外発展」観の内実は一体何であったのか。井上自伝をたどると、「従来は筋肉労働者と、小商人だけが主であつたが…南洋の如き熱帯植民地は、まづ資本植民地として、資本家・企業家がまづ優秀なる人物を続々送つて、或は支那人と或は欧米人其他各人と協同して事業を興し又は独立で計画してもよい。兎に角彼の国の法律習慣を尊重して、利益協同主義の下に事業を経営し労働者もこれに伴つて来る様になれば、追ひ追ひは資本植民地から移住植民地に進む事が出来るであろう」<sup>45</sup>との主張が浮かび上がる。要するに、1917年頃日本の南洋進出は軍事的膨脹ではなく、南洋における既存の欧米主導の秩序を認める「平和」な経済的進出である。南洋発展の将来性に鑑み、南洋での事業拡大を計画していた井上にとって、従来の肉体労働者ではなく、欧米人をはじめ現地の人々と協調できる高度な資質をもつ人材が必要であったと言えよう。

## IV 井上雅二の提案を取り入れた視察旅行の実態

## 1 視察都市と視察場所

視察者たちは、7月3日に大阪商船株式会社の香港丸に乗り込み、神戸から出発した。神戸基隆線と南洋線にそって、神戸→門司→基隆→廈門→香港→マニラ(米領フィリピン)→サンダカン(英領北ボルネオ)→バタビヤ(現インドネシアの首都ジャカルタ)→バンドン→ジョクジャ→ソーロー→スマラン→スラバヤ(以上、蘭領東インド)→マカッサル(蘭領セレベス島)→サンダカン→香港(広東)→打狗(現高雄)→基隆→門司→神戸というルート(図1)で各都市<sup>46</sup>を訪問した。9月14日に帰国し、計74日間、「陸路約六百哩ト千二百米、海路約八千七百哩」<sup>47</sup>の長旅であった。

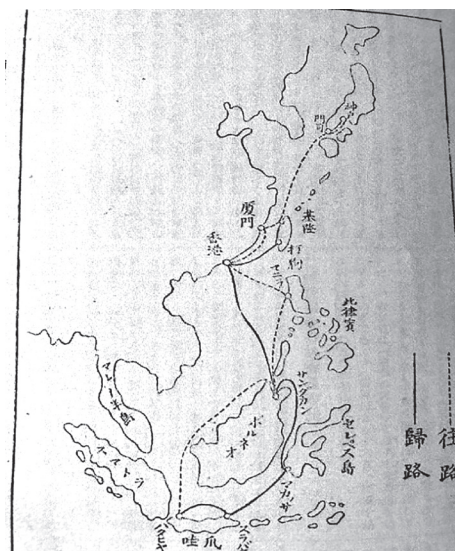


図1 1917年「帝国教育会主催南洋視察団」航路図  
『帝国教育』第420号、1917年7月、83頁より転載

文末の表5は、実際の日程表である。視察都市を見ると、帰路時に香港に立ち寄ってから広東を訪問したこと、南洋でまずサンダカンを訪れたこと、ジョクジャ、ソーローの訪問、これは前述の井上講話の提案どおりである。視察場所を見ると、椰子園や製糖業、製材所など、日本人移民や企業が参入している産業がよく見られた。明治期に南洋進出した雑貨屋や旅館、床屋などの小売業に加え、この時期に三井物産や台湾銀行などの大手企業も南洋に進出した。第一次世界大戦を契機に大手商社、銀行、海運会社、倉庫会社、農園など、本社の社命で派遣される人々の本格的な進出が始まり、まだら模様の邦人社会が形成されるようになった<sup>48</sup>。

また井上講話の提案に基づきバタビヤのバイテンブルグ植物園、ソーロー王城、スマランの「台湾籍民」郭春秋<sup>49</sup>の邸宅を見学した。井上は、1913年の海軍南洋視察に同行した際、既に

郭春秧と接点があった<sup>50</sup>。郭春秧宅を見学した教員は、郭の財力というより、日本籍を有したことで「一等国民」の待遇を享受したことや郭の子女に日本式教育を施した日本人家庭教師（元東京跡見女学校監たりし女流教育家）の異国での献身的な努力に注目した（稲田246号、30頁）。

表5から分かるように、視察者は至るところで、在留邦人の招待を受けていた。帝国の領土である台湾で言うまでもなく、欧米領地である南洋においても、視察者は多くの在留邦人のサポートを得ていた。「南支」、南洋の場合は上陸後、井上講話の提案どおりまず領事館に訪れた。その次は、日本人会、大企業の関係者からの接待を受けた。視察旅行は、井上を代表とする実業界の要望に応え実施され、現地の銀行や大企業を代表する実業家の支えによって成立された部分が大いと考えられる。例えば、ジャワの宿泊費不足が判明した際、基隆へ向かう船上で同乗した有馬商会主有馬彦吉は、南洋の銀行関係者に連絡し、同胞の家に泊まる手配を協力した。また実業家たちは、宴会や三井社宅でのテニスプレーや避暑地での休養、欧米人と日本人しか入会できない会員制ハーモニッククラブへの招待などによって視察者たちをもてなし、南洋邦人社会のエリート層や南洋進出の成功者たちの生活ぶりを体験させた。これらの人々は、井上講話に言及されている日本人の地位を上昇させた「知識階層」にあたる。

一方、視察者たちは井上講話にも言及された明治初期に南洋に渡った日本人移民との直接的接触は少なかった。航海中に会った日本人の漁業移民（稲田343号、32～33頁）や井上講話に「九州の島原や五島辺の婦人」「卑しい業務」と表現され、南洋で売春業に従事する日本人女性たる「からゆきさん」に対し、帝国の教育者としての優越感が表れている<sup>51</sup>。

また教員の視察旅行の特徴として、職業柄から教員が各都市で最も多く見学したのが教育機関である。台湾7ヶ所、「南支」2ヶ所、南洋18ヶ所であった。台湾の場合、視察者は同化教育に対する日本の腐心に理解を示しつつ、詰め込みの教育方法や教育効果に疑念を抱いた感想が見られた（稲田357号、27頁～28頁）。香港の場合、当時唯一の日本人小学校の校長が運営上の問題点を視察者に訴えた。南洋の場合、教員はオランダ人小学校の自由平等な教育理念に感銘を受けた。もう一つの特徴は、南洋移民の定住に関わる在留邦人の教育問題への視察者の注目である。有馬商会主有馬彦吉は、邦人子弟教育問題が在留邦人の中流以下の階層に抱えた特有の問題であると認識した。同時に「漸く緒に就きたる事業を棄て、或は折角熟練したる業務を抛ちて、子女教育の為めの故を以て、帰国するもの比々皆然り…邦家の受くる損失忍ぶべからず」と、自身が感じた危機感を教員に訴えていた。

教員の履歴から分かるように、一部の教員は満鮮視察旅行や植民地台湾、中国大陸での勤務経験を有していた。彼等は、過去の経験に基づき南洋視察旅行で目にした事象を解釈しようとした。例えば、森川は台湾の竹について、自身の中国武昌滞在経験に基づき、「支那」の竹林七賢や「支那人」の悠長な気質を表す長江の竹筏を連想し、かつての中国観をもって物事を見ていた。稲田は同船した久原農園の台湾労働者に対し、「島人氣質、否、支那人氣質を發揮し、喋る、唾く、博す、争ふ、盗す、その煩言ふべからず。葛天のむかしの民をまのあたり、さな

がらに見る船の上かな。葛天の昔の民は、喋り、唾き、争ひ、博せしならん。而かも、盜せしや否やは疑問なるべし」(稲田342号, 46頁)との感想を示した。かつての満鮮視察旅行で得た中国人への蔑視観をそのまま台湾人に移入したと言えよう。稲田と同じく日露戦争直後の満鮮視察旅行に参加した山田喜代松は、台湾労働者との交流を試みたが、あくまで「我が国体に関する概念」である紀元節、天長節をどのぐらい理解しているのか、すなわち同化教育の効果を探るための「交流」であった。新井博次は、「台湾の土人が非常に日本の言葉を話す者が多くなつたことであります、二十年前に私共が台湾に参りました時には、なかなか日本の言葉を話す者が少なかったのでありまして、殆どなかつたのであります」<sup>52</sup>と、台湾勤務時代と比較し台湾の日本語教育の成果やインフラの整備などの植民地統治の成果を指摘した。このように、教員の満鮮視察旅行や大陸また植民地台湾での勤務経験で形成した認識は、南洋視察旅行に投影された。

## V 井上講話の受容

### 1 井上の「海外発展」観への共感

講話内容から分かるように、「大国民たる精神」を養成するために、井上はまず海外発展における日本人の欠点を指摘した。比較対象として井上はよく南洋華僑に言及した。教員に向けた講話にも「支那人の如きも亦日本人よりも植民上に有望なる素質を有して居る…海外における支那人の膨張には驚くべきものがある…(井上自身が接した支那人の一人)最初苦力として渡来し、僅かに二十年の間に数十万の財産を造った。しかもかかる財産を有する今日、尚日曜の外は跣足で働いて居る。少し金でも出来ると直に隠居して花鳥風月を楽しむ日本人などと比較にならない。海外へ発展するには、日本人は支那人に学ぶべき所が少なくない」と、井上は海外発展における南洋華僑の忍耐強さと日本人の享楽を比較させ、植民適性の観点から高く評価した。華僑を注目する要因の一つは、井上自身の中国大陸での生活経験に基づくだけでなく、南洋開拓における華僑(「苦力」)の雇用でその特徴を熟知しているからであると考えられる。

団長森川勉は視察記に同じく南洋華僑を言及した(森川424号, 79~80頁)。以下、三点に分けて森川の見解を検討してみよう。第一に移民としての心構えについてである。森川は、「植民上に於ける日本人の欠点とも云ふべきは、植民に永住の決心のないことである…日本人の中には海外に於て大成功をして居るものが殆どない。小成功をすれば、直ちに帰国して仕舞ふからである…支那人の如きはこれと全く異り、移住地を故郷として背水の陣を敷いて闘ふので、日本人よりも海外に於ける成功者が遙かに多い」と述べ、中国人は日本人より南洋に永住の決心が強いと指摘した。

第二に失敗への対応力についてである。「日本人は逆境に堪える力が乏しい…支那人など



はこれと全く反対で、相当に成功して五十万六十万の財産を得ても、格別贅沢な真似もしないが、失敗して無一物になった時にも、左程失望もしない……数十万の財産を有して居たものでも一朝蹉跌すれば、また天秤棒一本を担いて、平気で商売をやる」と、中国人は失敗を恐れず立ち直るが早いと認めた。これは、井上講話に挙げた事例とも一致している。

第三に団結力についてである。「相互に団結して事業に従ふ点に於ては、日本人よりも支那人の方が遙かに優れて居る。支那人は三人で合同して会社を起せば其中の一人は事務の才幹があるから社長になり、一人は文字が巧みであるから書記になり、他の一人は外交員になると云ふやうに、各個人の性能によつて事務を分掌し、少しの不平等もなく会社の為の為に働く。これが日本人であれば、必ず三人とも盡く社長とならんことを希望し、書記や外交員になるものはない」と、華僑の団結力と協調性を評価した。

森川の指摘は、井上講話の華僑観と共通しており、その内容をさらに豊富化した。具体的な事例を挙げながら南洋華僑の特徴を指摘できるのは、井上講話の趣旨に共感したとともに森川自身の教習としての中国滞在経験にも基づいている部分もあると考えられる。

もう一つ注目したい点は、久原農園への関心である。森川は視察記にかなりの紙幅を割いて久原農園の技師から聞き取った農園の現状と問題点に関する情報を記録した。その情報によれば、設備が完備し、約600人を擁する久原農園に勤めた日本人は、「苦力」を監督する仕事に従事し、非常に安易な生活を送っているゆえ、精神的に退廃し体を壊したことで帰国せざるを得ない状況が生じた。この情報に基づき、森川は移民としての適性や資質、心構え、語学スキルなどに関する自身の見解を示した（森川429号、76～77頁）。最後に「現今の教育が徹底的でなく、意志の鍛錬が不充分であり、よく困苦缺乏不自由に耐へて、初一念を貫徹する底の人間を作られて居ることを証すると信じ、我等が教育方針の参考とすべき点と思ふ」と、若者の南洋定着の問題を生じさせたのは、日本内地の教育の不充分による問題だと自省し、意志鍛錬の教育が必要であるとの感想を述べた。

久原農園は井上が日産の久原房之助に出資を求め、オランダ植民政府が経営しているゴム園を買収した形で設立され、1916年から台湾総督府は久原農園に千人の台湾人労働者を送り出した<sup>53</sup>。1917年に井上が出資者森村市左衛門に南亜会社の事業拡大計画を相談した際、「従来の半島経営は、畢竟するに南洋に於ける経済的発展の第一歩に過ぎません。今や進んでボルネオ、スマトラ方面に進出す可の時です。殊に英領ボルネオは自分の最も買いたくを主張する処で、大阪の久原家の事業なども自分が怱怱したものです。若し貴方が賛成されるなら、勿論他処の仕事に委せるまでもない、自分が一番先頭を切ってやってみたいのです」<sup>54</sup>と、久原農園に対する自身の責任と意思を述べた。森川が久原農園の経営現状や従業員の資質上の問題を詳しく指摘したのは、井上の意思を考慮し、教育面からの協力を示すと推測できる。

## 2 井上講話との「ズレ」

一方、井上講話の趣旨に対し、教員の受け止め方は必ずしも一枚岩ではなかった。例えば稲田春治の視察記には、軽快な紀行文体で俳句を交えて視察旅行中の異国情緒を記録した特徴が見られた。稲田は南洋の「原住民」に関心を示した。彼は、視察記に椰子樹木登りのパフォーマンスや海上に建てた家屋の様子、娯楽施設、ソーロー王の兄と握手した様子を興味本位的に記録した。「原住民」との接触に感じたことを「瓜哇人の生活」(稲田350号, 35~36頁)という一節にまとめ、自身の南洋観を示した。その言説には「怠惰」「愚鈍」などの南洋の未開性・後進性を強調したこと、オランダ批判に見る西欧の南洋統治の妥当性への疑問を示したことという特徴が見られた。

また稲田は森川と同じく「組織的なる支那商人」(稲田347号, 23~24頁)という項目で南洋華僑に言及した。森川の視点と異なり、稲田は南洋華僑の長所を注目するのではなく、華僑の巧みな商売ネットワークが日本人の南洋発展に支障をもたらすことを指摘した。まず、「商業組織の、斯の如く秩序整然たるに加ふるに、個人性の営利に適するを以てす、その大を致す宜なりといふべし。若夫れ、かの商業道德といふに至りては道德を以てするを利益なりとする場合に於いては、道德を行ふと雖も、半開無智にして、算数に疎なる瓜哇人に対する取引には、秤衡を二三にし、升量を三四にするは、寧ろ公然の秘密といふべきなり」というように、稲田は中国人が組織的なネットワークをもって営利には得意であるが、ジャワ人を騙すと商売モラルが低いという見方を示した。

次に稲田は、南洋における日本の劣勢の原因を指摘した。すなわち「組織的連絡を以て、土人の嗜好に適する大口の注文をなす。資本豊富にして、土人の延勘定を苦とせず。製造家に対し、指揮権を有す」と、中国人商人は、広い商売ネットワークと豊富な資金力をもって市場の指揮権を握るに対し、日本は「各人孤立にして、用途嗜好の研究を欠け、纏りたる注文をなすこと能はず。資本に窮乏にして、資金の回収に急なり。注文主に対し屈従的なる」という受動的な立場に置かれた。井上は、日本人の欠点の一つを「粗製濫造」に挙げたが、稲田は、南洋に流通している日本商品の「粗製濫造」の状況を生み出したのは、「我が商業道德の不振とのみ責むべからず」、競争条件の不平等の影響によると指摘した。南洋華僑に対し、稲田は発展勢力不均衡の現状から出発し、警戒感とともに日本人を擁護する立場を取ろうとした。また久原農園について、稲田は僅かの記述で、経営規模や石油開発を目指す今後の経営構想に触れる程度であった(稲田343号, 37頁)。

## VI. おわりに

1917年に帝国教育会が主催した南洋視察旅行は、1916年に教育界において第一次世界大戦後の教育の在り方を巡る議論の中で提起され、「海外発展の気風養成」という趣旨の具現化とし

て行われた。一方、実業界の井上雅二は、教員に向けた事前講話を通して、教員の南洋視察旅行に関わった。講話に提案された事項は、実際の視察旅行に反映された。井上は、事前講話で海外発展における日本人の欠点を指摘したうえ、「大国民たる資格」を有する人材の養成を教員に期待した。ただし、井上講話に対する教員の受け止め方は、個々人の経験に基づき多様であった。

井上は、南進ブームのピーク期で南亜会社が軌道に乗り始めた1915年に出資者で実業家である森村市左衛門の知名度を生かし、自身の出身地での教育者との接触によって南洋理解を促そうとした。南亜会社の経営拡大にかかる第二期計画の立案時期にあたる1917年に、井上は事前講話を通じ教員の南洋視察旅行に関わったことで、南洋開拓事業の転換期に相応しい人材の養成の必要性を教育界に認識させようとした。教員の南洋視察旅行は、間接的に井上の南洋開拓を支えた性格を有していると考えられる。

また一部の教員は、かつての満鮮視察旅行で得た認識を南洋視察旅行に移入しようとした。これは、満鮮視察旅行と南洋視察旅行との連続性を示唆していると考えられる。史料と紙幅の制限で、詳細な分析に至らなかった点を次回の論考に譲りたい。合わせて日本の南進政策の展開とともに、南洋に対する井上雅二の関わり方も変化し、それは昭和期の南洋視察旅行にどのように反映されたのか、これについての考察も今後の課題にしたい。

表5 1917年「帝国教育会主催南洋視察団」の日程

日付	訪問都市	宿泊	視察場所	現地邦人との関わり
7.3	17:10 神戸港発	船中		同乗のスラバヤ在住の有馬彦吉氏が便宜提供を約束した。(森川430号, 73頁)
7.4	門司	船中		
7.7	11:30 基隆着 14:40 台北着	台北中学校寮	基隆築港 台湾神社, 芝山巖, 北投温泉 (稲田341号, 37頁)	同胞が船に乗り込み、一行を歓迎。台湾総督府工事部基隆支所のランチ招待。台北で台湾総督府による自動車の提供、北投温泉で台湾教育会関係による歓迎宴会。(稲田341号, 33-36頁)
7.8	台北	台北中学校寮	国語学校, 艋舺公学校, 国語学校附属女学校, 大稻埕公学校, 烏龍茶工場, 人工孵化場, 大稻埕公設市場, 大稻埕書房, 家鴨剥製所	国語学校で、隈本部長の教育談を聞き、校内展覧会を視察。鉄道ホテルで南洋協会支部の午餐会に出席。夜に邦人の紹介で台湾人林家の晩餐に招待された。(稲田341号, 37-39頁)
7.9	台北	台北中学校寮	専売局工場 (阿片工場・樟脳工場), 陳列場, 台北病院, 研究所, 博物館, 農事実験場, 水源地	民政長官官邸による招待。(稲田342号, 44頁)
7.10	15:30 基隆発 (襟裳丸)	船中		有馬彦吉氏が乗船せず、スラバヤ邦人による便宜提供の依頼状を船長に托した。(森川431号, 69頁)

7.11	19:00 厦門着 0:00 出帆	船中	市街, 旭瀛書院	台湾銀行支店, 三井物産出張所, 旭瀛書院, 領事館員の関係者による歓迎. 領事館で矢田部領事夫婦による歓待. (稲田, 342号, 47頁)
7.13	12:00 香港着	船中	市街, 植物園	教育委員総代, 児玉商船社員, 小堀小学校長の出迎え. 日本人倶楽部で加来美知雄領事官補の香港行政組織に関する講話を聞く. 清風楼日本旅館で日本風風呂の饗宴に出席し, 小堀校長より教育事情を聴取. 支那料亭陶園酒樓で在香港の大商店の代表者による歓迎宴(広東料理). (稲田342号, 49-51頁, 343号, 26頁)
7.14	15:30 香港出帆	船中	英国官憲の消毒検査, 市内見物	領事館へ挨拶. (森川428号, 72頁)
7.21	11:00 サンダカン着 18:30 出帆	船中	富士屋旅館, 雑貨店, 妓楼, ハリライヤなる日の様子を見学, 公開賭博場, 海上の土人の家	帝国教育会が通知した担当者は, 日本に帰国したため, 出迎えなし. (森川428号, 73頁)
7.28	8:00 タンヂオン・ブリオック港着 バタビヤ	船中	回教強寺院(緑結びの神), ジャワバンクの近くの壁に反逆者の頭に剣の彫像	松本領事, 花岡泰・吉野英の日本人会幹部の出迎え, 日程について打ち合わせ. その案内で銀行より現金を受け取り, 領事館で取調べをなす. (稲田344号, 23頁)
7.29	バタビヤ	ホテル・ネーゼランデン和蘭一等旅館	博物館, 夜市内見物, サイレンパーク(土人の娯楽施設)	領事館で休憩. ホテルで松本領事による午餐招宴. 領事の案内でハーモニークラブの音楽演奏に臨席. 芳野氏の案内で支那人経営の花屋敷を見る. (稲田344号, 27-28頁)
7.30	バタビヤ	同上	バイテンブルグ植物園, 高等農学校, 獣医学校, 有用植物園	松本領事の同伴, 商工局長による案内. (稲田344号, 29頁)
7.31	バタビヤ	同上	蘭支小学校・土人小学校・蘭人小学校・ウイルミナ工業学校・高等学校(和蘭視学官が案内)	夜, 日本人会主催の晚餐(支那料亭)に出席. (稲田345号, 21頁)
8.1	6:00 バタビヤ発 11:00 バンドン着	ホテル	護摩園, 規那林, 市中(幹部, ホテル・エクスプレス他, ホテル・スマランに分宿)	総督府によるジャワ観光専用車(一等客車A二十二号)の提供, 官線に限り無料乗車. (稲田345号, 23頁)
8.2	バンドン	同上	学校	和蘭視学官による案内.
8.3	6:00 バンドン発 13:30 ジョクジャ着	ホテル・トーゴー	市内見物	
8.4	ジョクジャ	同上	水城, ボルボトル佛跡, 土人に椰子の木を上させてみる→	(稲田345号, 26頁)
8.5	6:30 発 8:00 ソーロー着	支那客棧	王室附屬動物園に王及王妃を拝す. 更紗工場	(稲田346号, 26-27頁)
8.6	15:30 ソーロー発 18:00 スマラン着	ホテル・ヤンセン一等旅館	ソーロー王城拝観	拝観するには, 王家と和蘭官憲の許可が必要であるが, 在留同胞の斡旋で実現. ホテルも在留邦人の斡旋. (稲田346号, 25頁)
8.7	スマラン	同上	サラチガ避暑地, マンバラン水浴場, 蔗苗園	日本人会の招待により, 郊外避暑地を遊ぶ. 三井支店の社宅を訪問. 台湾籍民郭春秩の宅を訪問. (稲田346号, 29-30頁)
8.8	スマラン	同上	郊外見物	

8.9	スマラン	同上	学校参観	
8.10	12:00 スマラン発 19:20 スラバヤ着	船中		
8.11	スラバヤ	邦人宅	市内見物、動物園	
8.12	スラバヤ	邦人宅	ブリゲン避暑地、ボラック火山の中腹にある瀑布、スコレジョウ製糖会社、青年会	台湾銀行、台湾製糖会社、三井物産会社の共同案内で見学。青木氏のジャワ製糖の講話を聞く。 (稲田347号、28頁)
8.13	スラバヤ	邦人宅	学校参観	三井社宅の庭球に参加、主人阿部重兵衛の庭球発展の話を知る。台湾銀行社宅の純日本式晚餐に出席。岡崎商店社宅の日本人総会の茶話会に臨む。 (稲田348頁、28-30頁)
8.14	スラバヤ	邦人宅	築港見学	神戸高商卒の南洋郵船の石井功君の宅を訪問。 (稲田347号、32頁)
8.15	スラバヤ	邦人宅	市内見物	自由行動で、日本商店の木村氏と出会う。
8.16	スラバヤ	邦人宅	グリッセー市の人工養殖燕巢視察	自由行動。
8.17	16:00 スラバヤ乗船 (襟裳丸)	船中		午前三井社宅に参集し、大谷光瑞閣下の講話を一時半拝聴。在留諸氏の見送りを受け乗船。 (稲田350号、36頁)
8.18	21:30 スラバヤ発	船中	(ジャワ人の能率が悪いので、荷役が時間かかり、夜に出帆)	
8.21	18:00 マカッサ着		市内の夜景	税関通過は、領事よりの事前交渉で順調。在留同胞の出迎えを受け上陸。邦人経営の木村旅館の歓迎会に出席日本式料理。 (稲田351号、17頁)
8.22	夕方マカッサ出帆	船中	市内見物	木村旅館に集合し、川原商会で一行の為に収集陳列したセレベス及び東方諸島の産物を参観し、馬車で市内を観光。佐野氏宅の招待会に臨む。 (稲田351号、19頁)
8.26	サンダカン着		タンジョンアルー岸の安谷椰子園	加藤氏の案内。技師高橋農学士及び支配下の同行者より久原農園の事情を聴取。 (森川428号、76頁)
8.27	18:00 サンダカン発		市外の製材所、製油所	支那人の学校を発見、宅邸訪問。 (稲田352号、27頁)
9.2	17:00 香港着 (広西号で) 広東へ	船中		東京ホテルで小憩。 (稲田352号、30頁)
9.3	朝広東着 21:00 香港着 (九広鉄道で)	野村ホテル	華林寺、陳家廟、光孝寺、花塔、光塔、懷聖寺、滴水楼、花舫、後輪船	日本人会の有志が出迎え。総領事館に小憩。太田総領事から広東事情、南北時事を聴取。領事愛蔵の骨董品を観覧。日本人会の招待により真光公司以広東料理を堪能。夜に日本風呂、日本料理の晚餐。 (稲田353号、21頁、24頁、26-27頁)
9.4	12:00 香港出帆	船中	日本人小学校	小堀校長夫婦から麦酒・サイダの饗宴を受け。野村ホテルで主人の子どもの案内で土産購入。 (稲田354号、20頁)



9.6	6:00 打狗着 台南	旭館	打狗港, 市街, 台南庁	打狗小学校長, 工務部員, 台南庁員の出迎え, 諸説明を受けた。工務部のランチで港内巡覧, 楼上で築港工事並びに港務の説明を受けた。台南庁長枝徳二は, 兵庫県と関係ある紳士。(稲田354号, 22頁)
9.7	台南—安平—嘉義	嘉義ホテル	赤嵌城, 安平小学校, 開山神社	校長は, 御影師範出身の桜谷権次郎, 台南公館で午餐の招待あり。(稲田355号, 29頁)
9.8	嘉義—台中—新竹	塚田屋	嘉義製材所, 台中公園, 台中公立中学校, 文廟, 新竹公学校	新竹庁の案内で見学。(稲田356号, 26頁)
9.9	7:27 新竹発 10:40 台北着	太陽館		台北の府後街太陽館に旅塵を払い, 民政長官の官邸に参集, 殖民地経営の講話を聴取, 公園ライオンで台湾教育会の招宴に参加。(稲田357号, 28-29頁)
9.10	9:50 台北発 16:00 基隆出帆 (亜米利加丸)	船中		基隆吾妻亭で団員別離の宴を張る。(稲田357号, 29頁)
9.13	朝 門司着	船中		菊池, 八巻2名下船。(稲田357号, 29頁)
9.14	6:00 神戸着			同人諸顔の出迎えを受け, 神戸市教育会の催しなる元町宝亭の招宴, 正午兵庫県教育会の歓迎の饗を受け。(稲田357号, 29頁)

- 注: 1, 森川勉の視察記(計8篇)は, 次のタイトルで帝国教育会機関誌『帝国教育』に掲載されている。①「南洋視察談片」『帝国教育』第424号(1917年11月1日)②「南洋視察七十有四日の記」『帝国教育』第426号(1918年1月1日)③「南洋視察七十有六日の記」(二)『帝国教育』第427号(1918年2月1日)④「南洋視察七十有六日の記」(三)『帝国教育』第428号(1918年3月1日)⑤「南洋視察七十有六日の記」(四)『帝国教育』第429号(1918年4月1日)⑥「南洋視察椰子の葉かげ(一) — 『南洋視察七十有六日の記』続編」『帝国教育』第430号(1918年5月1日)⑦「南洋視察椰子の葉かげ(二)」『帝国教育』第431号(1918年6月1日)⑧「南洋視察椰子の葉かげ(三)」『帝国教育』第433号(1918年8月1日)。
- 2, 稲田春治の視察記のタイトルはすべて「南征記」(計18篇)であり, 兵庫県教育会機関誌『兵庫教育』第340号(1918年2月1日)～第357号(1919年7月1日)に連載されている。
- 3, 「日付」「訪問都市」「視察場所」は, 森川勉「南洋視察談片」(『帝国教育』第424号, 1917年11月1日, 73頁)に基づき整理した。斜体字部分は, 稲田春治の視察記により補完した。
- 4, 「現地邦人との関わり」は主に稲田春治の視察記に基づき整理し, 出典は「稲田〇号, 〇頁」と記す。斜体字部分は, 森川勉の視察記により補完し, 出典は「森川〇号, 〇頁」と記す。
- 5, 地名の表記は史料のままにした。

## 注

- 1 博士論文「小学校教員の『支那満鮮視察旅行』に関する研究」神戸大学総合人間科学研究科, 2008年12月。拙稿「一九三九(昭和一四)年の『小学校教員満洲国及中華民国視察』に関する研究」(神戸大学国際文化学会『国際文化』第20号, 2009年), 「満洲移民地視察のための小学校教員の『満鮮視察旅行』—秋田県教育会主催を事例にして—」(神戸大学教育学会『研究論叢』第19号, 2012年), 「中等教員の満鮮視察旅行—全国中等学校地理歴史科教員協議会の事例をととして」(立命館大学社会システム研究所紀要『社会システム研究』第30号, 2015年3月)など。
- 2 注1の拙稿の先行研究に関する分析の部分を参照。
- 3 南洋は, 1914年に第一次世界大戦勃発直後, 日本海軍が占領し, 1919年に国際連盟から委任統

治された当時ドイツ領の南洋群島（現在のミクロネシア、当時裏南洋または内南洋と呼ばれた）とその外に存在する地域（現在の東南アジア、当時表南洋または外南洋と呼ばれた）が分けられる。本稿で取りあげた「帝国教育会主催南洋視察団」の視察地域は、台湾、「南支」（厦門・香港・広東）および外南洋であったが、史料の記載に基づき視察旅行の名称をそのまま南洋視察旅行で統一した。

- 4 日本海軍が南洋群島を占領した直後、1915年1月20日文部省主導によって、帝国大学・高等商業学校・高等師範学校・高等農業学校の教員は海軍省御用船南海丸に便乗し、南洋群島の「風土文物ニ就キ調査研究」に派遣された（国立国家図書館デジタル資料『南洋新占領地視察報告』文部省専門学務局編、大正5年、書誌ID000000558905）。中等初等教員の南洋視察は、1917年の「帝国教育会主催南洋視察団」が初めてであった。
- 5 1927年から1932年まで文部省が人選を決め、福德生命保険株式会社が視察費を補助する形で、毎年欧米1名、南洋2名、満鮮15名計18名の初等中等教育機関の教員が視察旅行に派遣された。同視察旅行は1933年以後、欧米・南洋方面の派遣を中止し、満鮮方面に集約する形で、1936年まで継続された。その理由については次のように説明されている。「先年満洲国の建国以来、視察の範囲を朝鮮、満洲及北支の方面に限り、かの地に勃興せる教育の実情を審かに見聞して…満洲及北支に対する教育者の認識を深からしめることとせられたのは、現下の時局に鑑み実に機宜を得たものと言うべきである」（1936年報告書『文部省推薦派遣教育家の見たる満鮮事情』福德生命保険株式会社編、1937年出版、普通学務局長菊池豊三郎による序文）。なお、1927年から1936年にかけて行われた計10回の視察旅行の詳細については、今後の研究を通じて明らかにする予定である。
- 6 永見七郎『世界を股にかけて 井上雅二氏の前半生』日本植民通信社、1932年。永見七郎『興亜一路 井上雅二』刀江書院、1942年（復刻版、大空社、1997年）。
- 7 稲野強「日露戦争前夜に中央アジアを旅した日本人－井上雅二『中央亜細亜旅行記』（一九〇三年刊）に寄せて」『群馬県立女子大学紀要』第26号、2005年2月、111頁～123頁。
- 8 藤谷浩悦『井上雅二と秀の青春（一八九四―一九〇三）－明治時代のアジア主義と女子教育』集広社、2019年。
- 9 河原林直人「南洋協会という鏡－近代日本における『南進』を巡る『同床異夢』」京都大学人文科学研究所『人文学報』第91号、2004年12月。「東洋協会における南洋への関心について－1910年代を中心の一」『Discussion Paper No.77』名古屋学院大学総合研究所、2008年9月。横井香織「井上雅二と南洋協会の南進要員育成事業」立命館大学社会システム研究所紀要『社会システム研究』第16号、2008年3月。
- 10 主要分析対象である南洋視察団長森川勉と兵庫県参加者稲田春治の視察記のタイトルと掲載誌は、文末表5の注に記した。以下、二人の視察記を引用する際、引用文の後に「森川、〇〇号、〇〇頁」「稲田、〇〇号、〇〇頁」と略記する。

- 11 帝国教育会編『教育年鑑』文化書房, 1917年11月, 272頁.
- 12 『帝国教育』第409号, 1916年8月, 88頁~91頁.
- 13 『読売新聞』1917年5月6日. 『初等教育研究雑誌』23号(1917年5月, 362頁)にも同様な記載があった.
- 14 後藤乾一『日本の南進と大東亜共栄圏』めこん, 2022年, 28頁.
- 15 注4を参照.
- 16 注13に同じ, 「各々予算の関係もあれば参加者十二名に及ばざる時は此企図を中止すべし尚団員の日程表及旅費は七十日間三百五十円の予定なり」と記された.
- 17 『兵庫教育』第332号, 1917年6月6日, 57頁, 「南洋視察団」.
- 18 茨城県師範学校教諭吉澤俊一は台湾で盲腸炎にかかり南支南洋の視察を断念した. 『兵庫教育』第342号, 1918年4月, 44頁.
- 19 国立公文書館アジア歴史資料センター, レファレンスコード A04010092400件名「岐阜県師範学校教諭臼井勝三外一名清国政府ノ招聘ニ応シ俸給ヲ受クルノ件」.
- 20 『東京朝日新聞』9058号, 1911年10月24日, 4面.
- 21 『東京朝日新聞』9982号, 1914年5月5日, 3面.
- 22 長春商業学校同窓誌『白雪: 創立四十年記念号』白雪会本部, 1962年. 『官報』1283号(1931年4月13日)「長春商業学校長兼長春商業学校教諭森川勉願ニ依リ本職並兼職ヲ免ス」.
- 23 村瀬武雄(息子)『村瀬米之助』, 1936年8月, 81頁.
- 24 鳥居竜蔵『満蒙の探查』万里閣書房, 1928年, 24頁. 鳥居の調査は, 1895年に始まり, 今回は第6回である.
- 25 茨城県古河史蹟保存会『古河史跡写真帖』1935年, 40頁.
- 26 拙稿「1906(明治39)年における『満洲教員視察旅行』に関する研究」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』1(2), 2008年3月, 37-47頁.
- 27 隈部紫明 山下博『福博の人物』(第2編)福岡出版協会, 1935年, 136頁.
- 28 『福岡県教育会五十年史』福岡県教育会, 1939年, 213頁.
- 29 山本桃洲『大阪の公人: 附連合区制の小史』大阪の公人刊行事務所, 1916年, 650頁~651頁.
- 30 『人を人にする人: 奏任待遇小学校長事歴』三光舎, 1919年, 186頁~189頁. 西村天来『豊岡復興史』但馬新報社, 1935, 1頁. 伽藍康裕『興亜日本建国史第2巻下(近畿大観)』日本同盟通信社興亜日本建国史編纂部, 1940年, 166頁.
- 31 『初等教育研究雑誌』42(2), 1976年, 70頁, 「初等教育界の偉人稲田春治—兵庫県教育界の大立物」. 『大日本徳行録』第2巻, 大日本徳行録刊行会, 1943年, 1240頁. 『兵庫相互銀行五十年史』兵庫相互銀行, 1962年, 265頁.
- 32 『植民』12, 日本植民通信社, 1933年2月, 62頁, 「私の感心した海外奮闘家 南華に異彩を放つ森清太郎氏」.

- 33 『海外協会中央会各府県海外協会要覧』 海外協会中央会, 1928年, 78頁～79頁.
- 34 『横浜商業会議所年報第14回』 横浜商業会議所, 1917年, 107頁.
- 35 『兵庫教育』 355号, 1919年5月, 29頁, 稲田の視察記には, 「多大なる県費補助と郡費補助とを与へ」と山形県のことを言及した.
- 36 井上雅二『南方開拓を語る』 畝傍書房, 1942年, 68頁.
- 37 注36に同じ, 76頁.
- 38 井上雅二『剣掃録』 大参社, 1944年, 162頁～163頁.
- 39 永見七郎『世界を股にかけて: 井上雅二氏の前半生』 日本植民通信社, 1932年, 496頁～497頁.
- 40 河原林直人「東洋協会における南洋への関心について —1910年代を中心に—」『Discussion Paper No.77』 名古屋学院大学総合研究所, 2008年9月.
- 41 『帝国教育』 421号, 1917年8月, 82頁～87頁. 以下, 井上講話に関する引用は, すべてこれに依拠する.
- 42 『帝国教育』 第420号, 1917年7月1日, 83頁～84頁.
- 43 『帝国教育』 第426号, 1918年1月1日, 72頁.
- 44 『東洋時報』 222号, 1917年3月, 91頁.
- 45 注36に同じ, 262～263頁.
- 46 本稿に出た地名は, 史料の表記を保留しながら, 現在の地名と異なる場合, 現在の名称を付け加えた. また引用文・史料の中には, 現代に照らし合わせると不適切とされる表現も見られるが, 原文のままとした. 「支那人」「原住民」「籍民」などのように「」を付けて使用した場合もある.
- 47 『帝国教育』 第420号, 1917年7月, 84頁.
- 48 前掲後藤, 34頁.
- 49 福建省同安県に生まれ, 17歳からジャワで製糖業の経営で成功し, 台湾包種茶業に従事した. ジャワ華南銀行顧問や英華書院総理, 台湾茶商工会長などの肩書きを持っている. 「日支親善」への貢献が認められ, 1919年「叙勲五等授双光旭日章」と授与された（『東洋時報』 第248号, 1919年5月, 52頁, 原文は中国語）. 台湾経済史や華僑史, 「籍民」研究に必ず取りあげる人物の一人である. 郭に関する先行研究は, 詳しく河原林直人「領台初期における茶業を巡る商人の角逐: 郭春秧商標登録事件と『近代化』」（兵庫教育大学東洋史研究会『東洋史訪』 18号, 2011年12月）の注2（27頁）を参照.
- 50 注36に同じ, 261頁～262頁. 1913年軍艦淀がスマランに到着した際, 郭は知人を介し自ら井上との面会を要望し, 事業計画とともに自身の財力や人脈などをアピールした. 郭の人物像について, 井上は「其の人物は俊秀・議論正大・日支連盟を説い舌端火を発する所, 往々して聴くべきも点あり, 稀に見るの材と言ってよい」と評価した.
- 51 『神奈川県教育』 第154号, 1918年2月10日, 52頁. 村瀬米之助「南征日記」.

- 52 『内外盲人教育』第7巻秋号，東京盲学校，1918年10月19日，13頁～14頁。
- 53 鍾淑敏博士論文「日本統治時代における台湾の対外発展史：台湾総督府の『南支南洋』政策を中心に」，1996年，115頁，32頁。
- 54 永見七郎『世界を股にかけて：井上雅二氏の前半生』日本植民通信社，1932年，559頁。

### 参考文献

- ・永見七郎『世界を股にかけて 井上雅二氏の前半生』日本植民通信社，1932年。
- ・河原林直人「南洋協会という鏡－近代日本における『南進』を巡る『同床異夢』」京都大学人文科学研究所『人文学報』第91号，2004年12月。
- ・稲野強「日露戦争前夜に中央アジアを旅した日本人－井上雅二『中央亜細亜旅行記』（一九〇三年刊）に寄せて」『群馬県立女子大学紀要』第26号，2005年2月。
- ・河原林直人「東洋協会における南洋への関心について－1910年代を中心に－」『Discussion Paper No.77』名古屋学院大学総合研究所，2008年9月。
- ・横井香織「井上雅二と南洋協会の南進要員育成事業」立命館大学社会システム研究所紀要『社会システム研究』第16号，2008年3月。
- ・藤谷浩悦『井上雅二と秀の青春（一八九四―一九〇三）－明治時代のアジア主義と女子教育』集広社，2019年。

### 〈史料〉

- ・大日本帝国教育会会誌『帝国教育』
- ・兵庫県教育会会誌『兵庫教育』
- ・神奈川教育会会誌『神奈川教育』
- ・帝国教育会編『教育年鑑』
- ・東京協会同報『東洋時報』
- ・井上雅二『南方開拓を語る』畝傍書房，1944年。

付記：論文作成にあたり，立命館大学経済学部金丸裕一教授，同経営学部石川亮太教授から貴重なアドバイスを頂いたことに感謝の意を表したい。



A Study of “Nanyō Inspection Team Sponsored by the Educational Society of Empire of Japan” in 1917: A Cross Section of Masaji Inoue’s Perspective on Overseas Development  
Views Through a Teacher’s Study Tours to Nanyō

SONG Anning\*

**Abstract**

This paper clarifies the characteristics of the tour to the Nanyō sponsored by the Imperial Education Society in 1917. The study tour was proposed in 1916 in the educational circles as part of the debate over how education should be after World War I. On the other hand, Masaji Inoue, who turned his activities in the business world to the exploration of the South Seas in the 1910s, was involved in the teachers’ tours of the South Seas through preparatory lectures for teachers. The purpose of Inoue’s lecture, how to cultivate the qualities of Japanese people necessary for overseas development, was reflected in the inspection tour and was accepted by the teachers. The perception is not always monolithic, but rather diverse based on individual experiences, and there were also some gaps.

**Keywords:**

Study tours to Nanyō, Educational Society of Empire of Japan, Masaji Inoue, Nanyō boom, Perspective on Overseas Development

---

\* Correspondence to: SONG Anning

Visiting Researcher, Institute of Social Systems, BKC Research Organization of Social Sciences, Ritsumeikan University  
1-1-1 Noji Higashi, Kusatsu, Shiga, 525-8577 Japan

E-mail: anningyuning@yahoo.co.jp

